

【中国】 改革開放を生き抜く人々

下野寿子

改革開放が始まって三十余年が過ぎ、中国は世界第二位のGDPを誇る経済大国となった。かつて鄧小平が唱えた先富論は、格差を容認しながらも、最終的には皆が豊かになる社会を描いていた。振り返って現在の中国を観察すると、豊かさの代償として、毛沢東時代の平等主義は過度な競争に蹴散らされ、国内の経済格差は拡大し、開発優先の地域では環境汚染も甚だしい。

それでも改革開放は今後も中国の基本路線であり続ける。毛沢東時代の政治変動、とりわけ文化大革命（文革）

は、共産党の威信を損なうほど社会に深刻な傷痕を残したが、改革開放路線は人々を政治運動と決別させ、代わりに物質的豊かさと先進性を提示した。政治から経済への路線転換が覆らないと確信できる理由を、大陸に生きてきた人々の経験と心情を通して、映画は雄弁に語ってくれる。

中国映画には、官製のドキュメンタリーには出てこない庶民の生活や会話や風景がある。映画に組み込まれた挿話は、現代との比較により、改革開放が何をもたらしたのかについて考えるヒントを与えてくれる。経済発展著しい中国では数か月で市街の光景が変わることも珍しくないが、映画は撮影当時の街や人々の暮らしを部分的に伝え残してくれる。そのような点に着目しながら、以下に、それぞれ独自の視点から改革開放を語ってくれる三本の映画を紹介しよう。

旧中国から改革開放まで——政治に翻弄された庶民

大学院時代に出会った『活きる』（一九九四）は、新中国の成立から毛沢東時代にかけての政治変動が色彩と音をともなっており、自分に迫ってくるような迫力を感じた作品である。大学で教鞭をとるようになってからは、大躍進や文革の様子を視覚的に伝える材料として授業で取り上げることもある。

物語は一九四〇年代後半に始まる。賭博に明け暮れ家財を失った主人公・福貴は国共内戦の混乱に巻き込まれ、戦

場を転々とした後、新中国が成立した頃に漸く帰宅する。

時は社会主義時代の幕開けで、福貴は、運よく手にしていた人民解放軍への参加を証明する一枚の紙切れの効力に気づく。やがて大躍進が始まり、公共食堂や夜を徹しての鉄鋼生産の様子が映し出される。土法高炉から取り出された金属の塊を見て喜び、台湾解放を豪語する区長は、現在から見れば滑稽でさえある。

文革が始まると、貧民の福貴と区長たちの境遇は逆転し、幹部が失脚していく様子が婉曲に描かれている。娘・鳳霞の見合いから結婚式の場面は、贈り物の毛沢東語録に始まり、至る所に毛沢東の肖像が掲げられ、当時の世相を反映していて興味深い。貧民の階級、人民解放軍への参加、毛沢東の肖像画が描かれた家の外壁を手に入れた福貴一家は、紅衛兵に攻撃されることはなかったが、大躍進で息子を亡くし、文革の混乱で娘を亡くした。成長した孫と婿と福貴が鳳霞の墓参りをする最後の場面では、すでに文革は終わり、中国は改革開放を迎えようとしていた。

『活きる』は、新中国がもたらした社会秩序と価値観の目まぐるしい変化と、その中で懸命に生き延びようとする庶民の姿を伝えている。毛沢東時代、人々は政治に踊らされ、人生の貴重な時間と多くの命が失われた。一〇年の動乱の末に庶民が求めたものは、正常な生活、即ち安定した社会秩序の中で富を求めて経済活動を行う平穏な生活で

あった。文革を再発させないためにも、改革開放は決して後戻りしてはならないのである。

街の灯りと白洋淀が語る改革開放

『赤い服の少女』（一九八四）は、一九八〇年代初め、河北省の地方都市で暮らす四人家族の物語である。主人公・安然が日帰りのサイクリングで出かけた先が白洋淀であるから、おそらく保定市かその近郊が舞台であろう。映画の冒頭シーンでは、色褪せた文革のスローガンを掲げた人気がないトラックが走り去り、大きな荷物を抱え幼子（安然）を連れた母親が文革の痕跡も生々しい人気のない街を歩いて家に戻る。この家族が一家離散の憂き目に遭ったであろうことや、文革が終息に向かいつつあることを予感させる場面である。

数年後、一家は小さいアパートに住み、画家の父親は大学で講義を行い、母親は事務職に就き、姉（安静）は編集者になり、安然は高校生になっている。母親と安静は、安然が「三好学生」（思想品德、学習、身体面で優れている学生）に選ばれることを強く願っている。一方、深い洞察力と感受性を備えた安然は、自分が正しいと思ったことを言動で示すことから、担任の韋教諭や一部の級友には受け入れられない。安静は安然の理解者でありながら、かつての同級生であった韋教諭に便宜を図り、妹を三好学

生に指名させようと画策する。三好学生の選考日に韋教諭がクラスの学生を動員して安然を当選させる場面は、文革期の批判集会のパロディーとも受け取れる。文革期に青春を過ごした姉と一九八〇年代前半に青春を謳歌する妹の間には、明らかに世代の壁がある。文革の残滓と改革開放の進展との対照と解釈して観ても面白い作品である。

一九八〇年代の地方都市の風景も興味深い。まだ車は少なく、野暮ったい服を着せられたマネキンもあるが、物質的豊かさに触れ始めた人々の暮らしが垣間見える。「八〇年代の新農民」と安然が揶揄した男はサングラスをかけて「膨香酥」（トウモロコシを原料とする菓子）を売り、スカートを穿いた女性が軽やかに通りを往来する。質の良さそうなマットレスのベッドを展示した家具屋もある。安静が妹に買ってやった赤いプルオーバーが象徴するように、改革開放が始まると、人々は最初に生活の中の色彩を取り戻し、次に灯りを増やしていったのではなからうか。作品の中では、夜道を照らす街灯はまだ少なく、アパートの共用階段も薄暗い。当然、監視カメラもなかったことであろう。

ところで、安然が男子生徒とサイクリングに繰り出した白洋淀は、保定市から四〇キロ余りの場所にある。ここで、安然は自然の恵みを糧に生計を立てる人々を見て、人間の尊厳を感じとった。その白洋淀で二〇一二年八月中旬、大量の魚が死んだ（人民網二〇一二）。付近の養殖農

家によると、魚の大量死が発見される直前にどす黒い汚水が流れ込んできたという。安然が触れた豊かな水と緑あふれる白洋淀が三〇年後、白い腹を見せて浮かび上がった大量の魚とその死臭に覆われたという事実は、改革開放の一面を暗示しているように思えてならない。

国家プロジェクトの陰で生きる人々

『長江哀歌』^{エレジー}（二〇〇六）の舞台は重慶市奉節県である。主人公は、一六年前に別れた妻と娘を探しにやって来た山西省の炭鉱夫・韓三明である。嫁不足の農村で三〇〇〇元を出して買った四川省出身の妻・麻幺妹は女の子を産んだが、公安の捜査で人身売買が発覚し、妻は赤子を連れて故郷の奉節県へ戻った。金で買ったとはいえ、その後独身を貫いた三明には、不器用ながら別れた妻への思慕が感じられる。なけなしの所持金、タバコと歯ブラシと琺瑯のコップを入れた手提げかばん一つ、ポケットに入れた万能ナイフという簡素な旅支度で奉節へやって来た三明は、三峡ダム建設のために妻の実家を含む街の一部が長江の水底に沈んでしまったことを知る。そこに住んでいた人々は広東や遼寧へ強制移転させられ、移転しなかった義兄は船上生活者となり、幺妹は三万円で他の男に嫁いでいた。

三明は客棧の相部屋に住み、日雇いの解体作業をしながら妻との再会を待ちわびる。崩れかけたビルの上から急勾

配の街を眺める主人公の目線を通して、ダム建設のために街が急速に破壊されていく様子がみてとれる。解体作業は休みなく行われ、山と積まれた瓦礫の上に消毒液が撒かれる。国家プロジェクトの名の下に行われる巨大事業は、途方もない瓦礫と粉塵を生み出すことから始まる。

三峡ダム建設は李鵬前総理が推進した国家プロジェクトであったが、その施工にあたっては、長江の生態系への影響や移民の大量発生について国内外で強い懸念が表明されてきた。映画の後半では、三明が寝泊まりする宿を含め、海拔一五六メートルより低い場所にある全ての建物に「拆」（解体）の文字が記されていく。「二千年以上の歴史を持つ街を二年で取り壊す」という役人の言葉に、開発に向かつて疾走する中国の姿が重なる。一方で、手厚い補償もないまま移住を強いられる人々のやりどころのない怒りが次第に諦めへと変わっていく様子は、社会の底辺に追い込まれても生きる場所を求めて彷徨う人々の強さのようにも受け取れる。

映画に時折出てくる物価や賃金は、中国の経済格差を示唆する一つの物差しでもある。奉節の解体作業で得られる日当は五〇〇六〇元であり、一年間休みなしで働いても二万元前後である。一方、この時期の上海市では一人当たりGDPが五万一千四百元（二〇〇五年）であった（中国統計年鑑二〇〇六：六四一六六）。格差の拡大はさまざまな

社会問題を引き起こす。映画の中で、韓三明は幺妹に再会した後、彼女を買い戻すために故郷の閬炭鉱で働くことを決意する。閬炭鉱での日当は一日あたり二〇〇元になるが、年間十数人の死者を出す現場は死と隣り合わせでもある。実際に中国では炭鉱事故のニュースは珍しくない。映画を観終わった後も、三明のその後の運命が案じられる結末である。

三明たち労働者を雇用する側に立つ郭斌は、役所から解体作業を請け負う元締めである。二年間、郭斌の帰りを山西省で待ち侘びていた妻の沈紅は、意を決して奉節へやって来たが、夫に親しい女性がいることを確信すると離婚を決意する。沈紅が離婚を切り出す場面では、後方に巨大な三峡ダムが聳え立っている。わずか二年の間に生じた夫婦間の溝と、奉節県の容貌の変化が重なる瞬間である。

改革開放を生き抜く人々

本稿では、改革開放への転換とその後という観点から三本の映画を取り上げた。『活きる』は改革開放へ至るまでの道程を庶民の悲喜劇として語り、『赤い服の少女』は改革開放後も社会に残る文革の記憶とポスト文革世代の誕生を示唆している。改革開放も三十年近く続けば勝者と敗者を生み出し、社会に大きな矛盾をもたらした。『長江哀歌』は壮大な国家プロジェクトの陰に押しやられた人々の

生き様を描いている。それぞれの作品が伝えるある時あるところの庶民の声と作品中に埋め込まれた社会風刺こそ、中国映画の魅力ではなからうか。

●参考文献

『白洋淀二〇〇〇亩水域魚三天死光 官方結論未獲認可』『人民網』<http://society.people.com.cn/n/2012/0827/c1008-18836372.html> (二〇一二年八月二七日閲覧)。
『中国統計年鑑』二〇〇六年版。

映画リスト

『赤い服の少女』……①紅衣少女／Girl in Red、②ルー・シャオヤー（陸小雅）、③一九八四年、④中国、⑤中国語、⑥中国映画祭（一九九一）、テレビ放映（NHK）。

『活きる』……①活着、②チャン・イーモウ（張芸謀）、③一九九四年、④中国、⑤中国語、⑥劇場公開（二〇〇一）、ビデオ・DVD販売。

『長江哀歌』……①三峡好人／Still Life、②ジャ・ジャンクー（賈樟柯）、③二〇〇六年、④中国、⑤中国語、⑥劇場公開（二〇〇七）、DVD販売。

著者紹介

- ①氏名……下野寿子（しもの・ひさ子）。
②所属・職名……北九州市立大学外国語学部・准教授。
③生年・出身地……一九六八年、山口県。
④専門分野・地域……中国政治。

⑤学歴……広島大学総合科学部、広島大学大学院国際協力研究科（開発科学専攻）、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院（国際関係と太平洋研究）、立命館大学大学院国際関係学研究科。

⑥職歴……大卒後、民間企業勤務を経て大学院進学。博士号取得後、近畿大学を経て現職。

⑦現地滞在経験……米国（一九九七年から約二年間、留学）、北京（二〇〇〇年八月～二〇〇一年三月、留学）、上海（二〇一二年四月～九月、在外研究）。

⑧研究方法……インタビューや踏査によって地理的・歴史的條件などを確認し、その地域の発展の形態や問題点との関連性を探る。また、文革時や改革開放転換期の体験を語ってもらい、当時の社会状況への理解を深めている。

⑨所属学会……日本現代中国学会、日本国際政治学会。

⑩研究上の画期……一九八九年の天安門事件、東欧の民主化、冷戦の終焉から、一九九一年のソビエト崩壊までの時期。当時はまだ中国研究とは定めていなかったが、教科書で習ってきた「世界」が急速に崩れていくように感じられた。大学の授業でも冷戦史や国際関係を専門とする先生方が戸惑っておられる様子が明らかであった。グローバル化、民主化、体制移行、民族紛争の問題が次々と現れ、冷戦終焉が必ずしも平和を意味しないことを知り、未来に対する漠然とした不安を感じた。

⑪推薦図書……平野健一郎他編『インタビュ』 戦後日本の中国研究（平凡社、二〇一一年）。

⑫推薦する映画作品……『悲情城市』（侯孝賢監督、一九八九年、台湾）。